

久保田万太郎

現代日本文学館

22

小林秀雄 編集

文藝春秋

現代日本文学館22
宇野浩二・久保田万太郎

昭和四十四年三月一日第一刷

著者 宇野浩二
久保田万太郎

発行者 檜原雅春
発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三
電話東京(二六五)二二一一
振替東京七八七四三

印刷 凸版印刷
製本 凸版製本
定価 四八〇円

Printed in Japan

本全集の本文は現代表記にいたしました

目次

宇野浩二伝 水上勉 3

思い川 19

蔵の中 131

枯木のある風景 161

子の来歴 179

解説 204

久保田万太郎伝 池田弥三郎 211

朝顔 231

末枯 246

春泥 278

花冷え 359

うしろかげ 375

鍋井克之「思い川」
内山雨海「末枯」「春泥」「うしろかげ」

宇野浩二伝

水上勉

昭和二十二年の秋末だったか、と思う。宇野さんが泊まっておられた双葉館を訪ねた際に、中野重治氏がカンツメでおられ、その日に中野さんが宿を立たれた。宇野さんは私をみると、開口一番に、「中野という人はえらい人ですね。十日間カンツメされて、『学校』とたった二字しか書けなくて、出て行ったそうですよ。さあ、学校へ入って……と書きたかったんでしょかね、学校を卒えてから……と書きたかったんでしょかね。とにかく、十日間泊まっていたのに、学校の二字しか書けなかったというのは見あげたもんですよ」と云われた。中野重治氏の風貌が躍如とし、氏の文学の心構えがわかる挿話であると同時に、これは、宇野浩二その人の文学への心構えを物語っている。

私が宇野さんにお目にかかったのは、昭和二十一年であるが、そのころから、宇野さんは、小説を書くことが苦しくて、一日に二字はおろか、一字も書けず、机に肘をついて、じっと考えこんでおられるような日が多くなっていた。双葉館の暗い部屋でもそうだった。のちに引越された森川町の、終焉の家となった、あのうなぎの寢床のように細長くて、暗い北向きの部屋でも見かけた姿である。年ふるごとに、苦しさはつって、晩年は病氣もあって、一字も書けないままに、原稿紙をにらみ、書斎にじっと閉じこも

っておられた。あの、わずか、半ペラ五枚ほどの絶筆になった、「人間同志」も骨を刻むような文章だったと思う。先生は、戦後、筋肉痛といって、右腕がこわばり、ペンがもてない、という奇妙な病氣にかかられて、本集に収められた「思い川」のように、私や記者が書斎によばれて、口述筆記で発表されたものがかなりある。口述筆記は、病氣の先生が横になっておられて、話されることを筆記者がうつしたものを、あとで、先生が時間をかけて清書されたもので、速度はだいたい一日に半ペラ五枚すすめばいい方であった。「思い川」も、なまなかの苦吟で完結されたものではなかったのである。

宇野さんは、戦後はそのような遅筆の人だったが、昭和四年ごろまではだいぶちがっていた。《私は中学時代から約二十年間、ほとんど寢床の中で、夏でもうすい掛蒲団をかけて書く奇妙な習慣をもっていた。そうして、よほど原稿の締切りに迫られた時のほかは、書くのは「日のある間」にかぎっていた》と本人も書いておられる。林芙美子さんが、宇野さんを訪れて、小説についてよもやま話が出た際、「しゃべるように、寝こんで私は書きますよ」と宇野さんがいわれた挿話も、かなり有名だが、寝こんでしゃべるように書けた作家もめずらしいとはいえるけれども、宇野さんという人をこの挿話は不思議とどこか神秘的に思わせる。

今ならとやかく云われようが、このようなことも、宇野

さんのトクを物語っている。しかし、私などは、戦後に、身近に接近できて、先生の遅筆ぶりを眼のあたり見たので、果して、この人が昔そんなにすらすらと書かれた時代があったのかと、想像もできなかった。

宇野さんという人は、一般に云われているように、大患以前と以後とは、原稿に向かう心構えも力も、まるきり違ったのではないか。「ひところの宇野は一日に五十枚ぐらいい書きましたね」と生前の広津和郎氏もおっしゃっていたことと思いいあわせ、また宇野さんが、大正八年に、「蔵の中」を発表して、一躍文壇の寵児(ちゆうぎ)になり、流行作家となり、月づき異色作を、発表された時期は、まったく、寝ころんで書けた時代だったろうと思う。饒舌(じょうぜつ)体のあの数多い作品にはほとぼしするような軽妙さがある。だが、大患



昭和36年 湯河原で 左から宇野 玉子夫人 水上勉

以後は、作風もかわって、従来の大阪調の饒舌や、多少の諧謔(かいぎやく)味のある文体を切りすて、現実感のこもったつめたい文章に変わる。「枯木のある風景」がそうだし、戦争末期、疎開時代の作品も、寝ころびながら書けなくなり、起きて、とつとつとしゃべるように書かれた時代といえようか。とすると、戦後の十六年間の苦吟は、「思い川」から絶筆にいたる苦痛の時代であろう。広津先生にいわせると、「彼流に散文を追求して行く間にいつか非情の世界に到達」し、「人里から離れた誰も来ない山の中で、こつこつと自分の見たものを木に刻んでいる、にこりともしない仙人」のような、極北の凍土へふみこまれた時期であろう。作風とともに、その生活にも、三様の波瀾(はらん)があった人である。

II

宇野さんは、明治二十四年七月二十六日に福岡市の南湊町に生まれた。本名は格次郎といった。お父さんは六三郎といい、大阪府西成郡の出身で、福岡師範学校の国漢の教師だった。宇野家は、信濃(しんのう)の滋野家の出で、祖先は信濃の人。このお父さんは、大酒家だったということだが、宇野さんが三歳の時に脳溢血で亡くなり、一家はお父さんの従兄本多義知を頼って神戸市湊町番外二十三番地屋敷へ転居する。お父さんの遺産は伯母方の入江家にあずけられたが、この入江家が没落し、遺産もなくされてしまったので、お

母さんは、遠縁の親戚を頼って奈良県の天満村に移った。残された宇野さんと祖母さんは、大阪市南区宗右衛門町にいた伯父福岡信十郎の家にあずけられた。ここで宇野さんは、いわゆるその青春時代を十九歳まですごすのだが、同町内に、保高德蔵がいたり、十三歳で天王寺中学に入って、寺内万治郎、鍋井克之と知りあい、折口信夫や武田祐吉らが上級にいたこともあって、その文学の出発は十九歳で上京して、牛込区白銀町に住み、近くにいた近松秋江を知って、翌明治四十五年に青木大乗、三上於菟吉、斎藤寛らと文芸雑誌「しれえね」を大阪で発刊する日といえるが、宗右衛門町は文学的にもゆりかごの地といえる。この雑誌に、宇野さんは戯曲「暁の歌」を発表したが、三上の小説の発禁で、創刊号だけで廃刊になった。

宇野さんが育った宗右衛門町は、大阪南の花街である。のちの「十軒路地」にくわしく出てくるが、奇妙な路地で、芸妓置屋、妾宅、遊び人などがいて、入口には門があり、夜になると当番の人がいちいち締めにかねばならないというような奇妙な上方特有の路地であった。伯父さんの家は中央にあつて、宇野さんは、祖母さんといっしょに寝たよく眠れない夜などは、床の中で眼をあけていると、遅がえりの芸妓さんが、締め出しを喰って門をたたいていた。また、すぐ戸の外を、草履の音をしのばせて帰る酔っぱらった幼ない芸妓の足音もきいた、と「十間路地」にみえる。参筋向いの周旋業宮本家の息子卯三郎の妹八重子を思慕



母・京 晩年のものらしい

したが、八重子は芸妓となった」と小田切進氏の年譜にもある。やはりこの宗右衛門町の十八年の生活は、宇野浩二の全生涯に、一つの影を刻んでいるようだ。宇野さんは、のち東京に住んで大阪へは帰らなかつたが、大阪は十九歳までの生活でしかなかったものの、晩年まで、大阪風の作家、上方饒舌風の作家といわれ、文学的にも大阪から抜け出ることはできなかった。同時に、生活の趣向にも、宗右衛門町の経験が多分に残っていて、森川町の家でも、上野桜木町でも、いや、それ以前の世田ヶ谷でも、宇野さんが、三味線を持っていたこともその現われだ。「思い川」によると、時には口三味線もひけたとある。幼少時からの宗右衛門町で三絃の音をきいたことも、また、天満村に移って、のち、東京でいっしょに暮らすようになったお母さんが、歌と踊りの妙手であつたことも理由になるが、晩年二十年

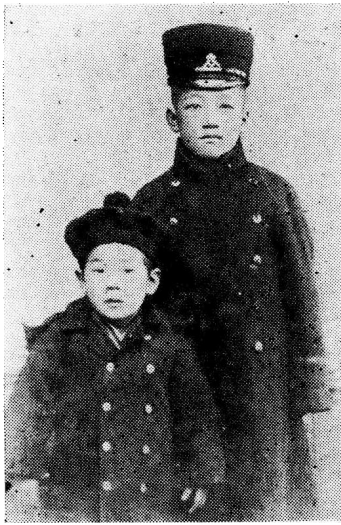
近い間を、身近にみてきた私などにも、宇野さんのどこかに、いつも上方ふうなイキがのぞいていた。着衣や、趣味や、言動に、それがよくみうけられたことも思いだされる。また、「子を貸し屋」を頂点とする庶民物ともいうべき、諧謔をまじえた作品や、私小説的な、身辺の人を材料にした作品にも、ぬきがたい庶民性が裏打ちされてあるのはこの宗右衛門町と無関係ではないように思う。

Ⅲ

出世作「蔵の中」は大正八年四月、「文章世界」に発表された。二十八歳の時である。作品については、解説でまたふれることにするが、近松秋江をモデルにしたことは有名で、宇野さんは、この話を広津さんからきいてヒントとした。すなわち、広津さんは、「近松秋江は質に入れた自

分の着物を虫干しするために質屋に出かけ、ふとんの中に寝てそれを眺めていた」というだけの話をしたのに、宇野さんは自分流の小説に書きかえたのである。宇野さん流というのは、正確に言えば、「蔵の中」からはじまっているから、それ以前にはない。「そして……」から書き出されるこの小説は、当時としては新しく、また人を唖っていたかもしれない。宇野さんは、近松秋江の挿話に自己の経験、ヒステリー女とのいきさつをからませて、独自の諧謔味ある、苦渋にみちた、しかも明るい小説に仕立てて、当時文壇を席捲していた暗い自然主義に、痛快にこの問題作を投げこんだ感がある。文壇内外の注視をあびて、宇野さんは一躍新進作家となった。

モデルとなったヒステリー女は、九月に「解放」に発表される傑作「苦の世界」に登場する伊沢きみ子で、宇野さんは大正五年、二十五歳の時に、この女と逢っている。きみ子は、台湾総督までしたことのある伊沢多喜男の姪で、当時、蠟穀町の私娼窟にいた。宇野さんは、友人の画家たちにつれられて、馴染むようになり、五六回の交際で、もう急速に同棲するまでにいたった。伊沢多喜男は、警視總監もした人だが、在任一年余の間に、市内の私娼窟を向島に限るというような改革もした男で、そのおかげで姪のきみ子は蠟穀町におれなくなつて、宇野さんに近づいて押しかけ女房となつた感がある。考えてみると無茶きわまりない話で、二十五歳の宇野さんは、まだ無名に等しく、高須梅溪



兄・崙太郎(右)と生涯で最初の写真がこれである

の紹介で「少女の友」に童話などかいていたところである。しかも、奈良から上京してきたお母さんといっしょだった。そこへきみ子が入居した。経済面からいっても何からいっても無茶で、お母さんは十月に大阪の伯父の看病がてら帰阪したが、その留守中に、宇野さんは西片町の家をたたんで、中渋谷に逃亡。「水上瀧」と偽名を使って住んだ。横須賀の芸妓になったきみ子をさけるためであった。この、女との愛憎のこみ入った事情を、初期宇野調の、ほとぼしる饒舌体で書いたものが「苦の世界」である。

大正九年、二十九歳で、「改造」に「恋愛合戦」、「中央公論」に「人心」、「雄弁」に「あの頃の事」、「東京日日新聞」に「高い山から」などを発表する。すでに宇野さんは流行作家であったが、しゃべるように、しかも寝ころんで書けたという時代の最頂点であろう。この年に宇野さんは、上野桜木町一七一番地の家に越して、十一月には村田キヌと結婚した。同時に、晩年の夫人となった星野玉子とも、銀座の喫茶店で知りあった。

村田キヌは下諏訪に出ていた芸妓である。宇野さんは、大正八年から、広津さんと下諏訪に出かけている。この時によんだ妓が鮎子こと原とみ子で、彼女はすでに子持ちだった。宇野さんはこの女性に興味をもつようになり、再々飯田橋駅から中央線に乗って、下諏訪ゆきをつづける。この間の事情を書いたのが、「山恋い」である。宇野さんは、夢子と名づけて、あきなく、彼女への思慕を書きつづり、

いわゆる諏訪物といわれる連作物を逐次発表した。私などは宇野さんの初期の作品の中でどれが好きかとずねられれば、この「山恋い」一巻は、「蔵の中」「苦の世界」も絶品ながら、捨てがたい愛着をおぼえるのである。いってみれば、川端康成の「雪国」にも匹敵する宇野さんの「諏訪恋い」だ。宇野さんはまだ独身だった。しかも流行作家であった。原とみ子は、子持ちだから、結婚の対象にはならない。それで事実には淡白な交際でしかなかったのだろう。とみ子は、宇野さんに姉芸妓である「小滝」こと村田キヌを結婚の相手として、すすめるのである。宇野さんは、原とみ子の方が好きであったが、彼女とはどうすることもできない事情にあることもわかっている。自然と「小滝」と関係をもつようになった。村田キヌは、もう三十近くて、芸妓屋の看板もち、自由な身柄だったので、東京の宇野宅へ押しかけてきて、結婚するにいたった。これが宇野さんの第一夫人を得る経過だが、それで、宇野さんは、諏訪ゆきを止めたわけではなかった。キヌにかくれて、たびたび夢子に会いにゆき、そうして、あいかわらずの淡白な交際をつづけた。

妻がありながら、もう一人の女性と肉体関係に陥ることなく、恋愛遊戯とおもえるような関係をつづけてゆくこの趣向は、のち、寝ころんで小説が書けなくなつて、苦吟に苦吟をかさねて完成される傑作「思い川」の主題でもある。宇野さんのこの恋愛至上主義的な、清純な一面は、

若いころから晩年にまであったとみるべきである。

村田キヌを妻にして、桜木町に置き、宇野さんは、本郷菊富士ホテルを仕事場にして、いくたの作品を書いた。「子を貸し屋」は大正十三年四月の傑作で、私娼窟の女が定められた家以外で男と交渉するのを禁じられてもいたので、警察の眼をごまかすために子供を借りに来る、いかにも、恋人のあいびきらしく見せかけて、交渉をすませるといふどこかで聞いた話を、宇野さんが、団子屋の佐蔵という人物をつくって、その商売や、性格や、その周囲の人たちのことを、面白く描き分けつつ、佐蔵が子を貸す商売に堕ちて行く経過を克明に書いている。宇野さんのこれまでの作品は、自分か、それとも自分の女か、肉親縁故かが、必ずモデルになっていて、その饒舌的文章から、ややもすると軽妙な、楽天性がうかがわれたものだが、「子を貸し屋」にはそれがなく、現実味の濃い客観小説となり、結構もすばらしかった。この時代の庶民を描ききった傑作として、私など今日も読み返す作品である。宇野さんの作品を論ずるに手厳しかった正宗白鳥も、『氏は多数の作品を出した一人であって、そのうちには傑作と云っていいもの、佳作と云っていいものも少なくないのであるが、私の読んだ範囲では「子を貸し屋」が、氏の持味を十分に漂わせた渾然たる創作品であったと思う。文学史上に残すに価している』と賞め、宇野氏の打ち明け話によると、「この小説は全く空想で構想された」のだそうだ。「浅草にプロステイ

テュト相手に子を貸す商売をしている者があるというだけの話を友人から聞いて、その話を元で」百枚以上のものを作り上げた」と白鳥は驚嘆している。

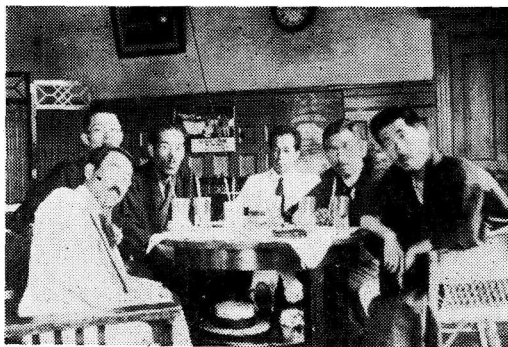
IV

宇野さんの大患にかかられるのは昭和二年の六月である。宇野さんは、精神異常を来たし、広津和郎、芥川龍之介、永瀬義郎の世話になり、斎藤茂吉の紹介で、小峰病院に入院する。この入院中に、芥川龍之介が自殺してしまう。プロレタリア文学

の擡頭期である。いわゆる芸術派の立場にあ

った宇野さんや芥川には、生活的だけでない不安があったのかもしれない。

広津さんは「あの時代」で、宇野さんの病因は、潜伏していた病菌のせいだろうと判定して



左から久米正雄 片岡鉄兵 宇野 里見弴
加能作次郎 佐佐木茂策 大正11年大阪で

おられるが、宇野さんには、家庭の事情も多分にあった。キヌとの間に子はなく、宇野さんには、星野玉子との間に子が出来ていた。しかも、桜木町の家には、お母さんと、兄さんの寄太郎という、精薄の人が同居していた。そのような家庭は暗かったろう、生活費もかさばる。宇野さんは菊富士ホテルに逃亡して、そこを城に、多数の作品を書いたのである。辛労もようやくこの時期に押しよせたとも考えられる。大患は八年の「枯木のある風景」の完了直前までつづく。その間に、宇野さんは、病院で療養したり、箱根の塔ノ沢に静養したり、小田原に遊んで牧野信一と交際したりしているが、昭和五年には再発して、翌年は「赤い鳥」や「少年倶楽部」などに童話を書くぐらいが仕事で、ほとんど仕事という仕事はしておられない。

「枯木のある風景」は、「改造」の記者であった上林曉氏が、大患の宇野さんを視つづけて、再起の原稿を書かせるに百度をふみ、宇野さんを勇気づけて、苦心の末に完了させた作品である。宇野文学中期の金字塔となった。つづいて、宇野さんは、三月に「枯野の夢」、七月に「子の来歴」を発表。十月には「文学界」の同人に参加した。病氣は完全に快癒したとみていい。

「枯木のある風景」「枯野の夢」「子の来歴」への讃辞は、時の文芸時評を受け持った小林秀雄、川端康成の絶讃を博した。中村光夫氏も「枯木のある風景」を、

『氏の復活を世に示す第一作でしたが、そこで氏は芸術家

の生活と制作の微妙な問題をあつかい、作者の生命をむしばんで育つ芸術の無気味な性格をたくみに描き出しています。



大正9年下諏訪で 左から谷崎精二 村田キヌ 一人おいて宇野

「夢」「子の来歴」などを発表しましたが、(中略)前者は後年の氏の小説の原型をなすものです。ある人間の生活の起伏を長い期間にわたって描き、そこにおのずから人事の変遷、時勢の推移を写しだし、生死の劇にみちた人生の相をうかびあがらせるのは、とくに戦後氏が好んだ手法です。また後者はおそらく作者自身と思われる主人公が、かくし子をひきとるまでのいきさつを手短かにのべたもので、小林秀雄、川端康成の両氏が絶讃したため、前期の「子を貸し屋」とならんで氏の代表作に数えられています。昭和の初年度は、ある意味では、氏の文学的名声が絶頂に達したときです。大正期のような華々しい一般性はなくとも、専門の作家たちの、とくに



岡本一平えがく宇野浩二像 万年
床と三味線は生涯離れなかつた

若いエリットの尊敬を一身にあつめる趣きがありました。とその作品解説で述べている。時に宇野さんは四十二歳であった。桜木町の家には星野玉子の子守道が入居していた、兄嵯太郎、母、妻との五人暮らしがはじまっていたが、昭和十年十月にお母さんが死去、十九年には、兄嵯太郎さんが死去した。文学的な業績としては、「器用貧乏」「夢の通い路」があり、昭和十三年に芥川賞銓衡委員、十五年に第二回菊池寛賞をうけている。この時代は、軍国主義下に入る時代で、ジャーナリズムは次第に宇野さんのような作品を掲載しなくなった。で、宇野さんは「文学的散歩」「文学の三十年」などを「改造」「中央公論」に連載して、戦争とは全く関わりのない文学の話を書くことに終始した。「宇野浩二回想」に集められた同時代の作家たち、高見順や川崎長太郎の文章を読むと、この時代に宇野さんを中心と

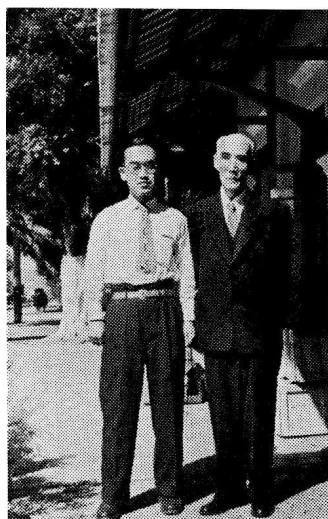
する日曜会が月に一度催されていたが、戦局も緊急を告げてくると、ある日の会合などは、特高に踏み込まれた。しかし、宇野さんは、会場で戦争や政治に関する話が起きても、知らぬ顔で、皆があんまり長話をしていると、「文学の話をしましょう」といって、小説の話、作家の話以外には、全く無関心であったそうだ。「文学好きな作家」は宇野浩二をもって最後だと評する人もあるほどで、宇野さんのことを「文学の鬼」または「小説の鬼」などという事情もこのあたりからうかがえるのである。

V

宇野さんは、戦争が激しくなると疎開を思い立って、北沢喜代治さんの世話で松本市近くの島立村の岩間方に行かれ、のちに、松本市今町の折井という醸造家の離れに住まわれた。ここで、キヌさんが病気になる、翌二十一年の二月、冬のさなかの、物の不自由な時期に死去されるのである。「うつりかわり」はこの奥さんのことを、疎開時分の家庭の事情を織りまぜて書かれた、戦後の傑作であるが、ついで、宇野さんは、「思ひ川」を「人間」に連載しはじめた。これは、前にも述べたように、清純な恋愛の対象として、宇野さんが、大患以前から知り合い、交際を続けていた村上八重、広津さんにいわせると、「永遠の女性像」とも思える八重次を、この世のこととも思えぬ恋物語の長篇小説で描破した。内容については解説でふれるが、この

小説の構想は、すでに松本時代にあって、宇野さんは、奥さんの死去後は、松本の家と、本郷双葉館を半々につかい、筋肉痛の激発から、口述筆記も余儀なくされた。当時、「新文芸」を編集していた私などが、先生の「文学の手帖」を口述筆記した縁から、重宝がられるようになり、よく私に、「コウジュツタノム」の電報を打ってよこし、私が気前よく通うものだから、つい、大作の「思い川」や「相思草」や「思い出の家」やの大半を、筋肉痛が起きるたびに、口述ですすめられることになったのである。したがって、私などは、戦後早々の先生と晩年の先生を、もつとも身近に見た者の一人であらう。

双葉館から森川町の七十七番地の家を買われて、引っ越されたが、松本の荷物や、分散していた書籍をこの家に集め、整理をした日も今はなつかしいが、森川町の家では、「器用貧乏」の主人公である鈴木コウさん、古川さんとその娘さん、若い女中さんなど、入れかわり立ちかわり、身の廻りを世話した人はいたものの、奥さんの死後、全く「自分一人」となられた孤独な鬼の世話である。なかなかてこずるところもあり、世話びとたちはつぎつぎとやめていった。ある日などは、宇野さんはひとりで食料を買いに出る始末であった。二十四年に、宇野さんは芸術院会員になったが、芸術院会員の家に風呂がなくて、毎日銭湯通いである。当時、同町近くに住んだ臼井吉見さんは、(宇野さんとはよく銭湯でいっしょになった。二時か三時ごろで、



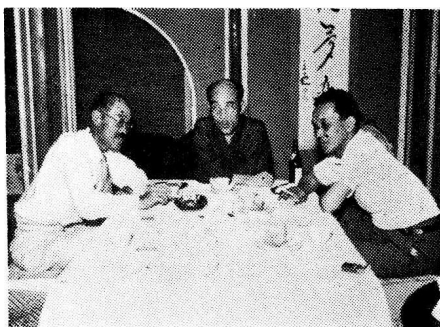
昭和31年 中国旅行
左は同行した長男守道

広い流し場に、客は二人という場合がしばしばだった。例によって小説ならびに小説家の話が始まるのがおきまりだが、それが綿々としていつ果てるとも知れなかった。肩から胸にかけて、白い痣(あざ)の見える、はだかを寄せてきて、「あの芥川がねえ……」と何か重大な秘密でも打ちあけるみたいに、耳うちして、さて話し出すのは、なんのこともない、前に何回となく聞かされたゴシップのくりかえしだった。しまいには、僕も、ほとほと閉口して、ガラス戸を透かして、宇野さんの姿が見えると逃げ帰ることにした。と当時のことを回想しておられるが、臼井さんはさらに、(宇野さんの文学的信条は、老来いよいよ牢固(うろう)たるものがあったようだ。貧乏と、おんなど、病氣と、——この三つのものに悩まされたものだけが、一流の作家たる資格があるということ、三つのうち一つを欠くものは二流、二つを

欠くものは三流、三つとも欠いているのは所詮文学に縁なき衆生（しゅせい）というのが、宇野浩二の文学観の根本であろう。戦後の混乱期に、銭湯の流し場で、長々と拝聴（はいしやう）させられた小説ならびに小説家についてのつきることなきよもやまばなしも、煎じつめればそこに帰着するのであった」といい、《宇野さんの死はそういう古風な文学観の亡びをも意味している》と書いておられる。

VI

昭和二十八年に、乾元社から「宇野浩二著作集」が刊行されはじめ、五、七月には、広津さんに誘われて仙台にゆ



左から久米正雄 宇野 広津和郎 戦後間もなくのころ

かれ、松川事件の裁判を傍聴、「世にも不思議な物語」を執筆され、その文学的生涯で、もっとも宇野さんらしくない、社会的関心による松川事件に筆を染められた。これはたぶん、広津さんの影響もあったと思われるが、この文章の表題に「当て事と禪」と

されているのをみてもわかるように、やはり、宇野的な物の見方というか、その筆はこびの巧みさはみごとである。三十一年に、久保田万太郎氏、青野季吉氏とともに中国旅行に出発される。これも、出ることの嫌いだっただ宇野さんにしては特筆すべきことだが、この前年の四月には、宇野さんはすでに咯血（かっけつ）しておられた。

私が、しばらく、森川町を訪れなくなっていたのは、宇野邸に星野玉子さんが入居されて、中国旅行以後、健康の思わしくない先生を看（み）られ、守道さん夫妻も、都内に住み、先生の世話に手がまわるようになったからで、宇野さんからのいくどものハガキや、玉子さんからの電話があっても私はいかなかった。お宅へ何うようになったのは、三十六年ごろからで、寝たり起きたりがくりかえされるようになってからであった。

森川町の家は、もう、二階がつけ足されていて、風呂もあった。先生は、夏は階下、冬は二階で、あいかわらずの万年床で、わきに取り散らした書籍や雑誌を置き、気分がよければ、机に向かっておられた。三十六年の五月に、小康を得られたので、湯河原へ行きたいとおっしゃり、玉子さん、守道さん、私と、そのほかに文春の星野氏。これが先生の最後の旅行となった。宇野さんは、汽車の中でも旅館でもはしゃぎ、にこにこし、思い出ふかい湯河原の天野屋で、過去の女のことや、「湯河原三界」時代のことを休まずに話された。この旅行はまことに楽しかったが、帰京

してすぐまた寝たり起きたりの生活がつづき、九月二十一日に、とうとう大咯血^{だかくちけつ}をして亡くなられた。肺結核であった。

宇野さんは、医者ぎらいの一面があった。というのは、森川町の近くに本多さんという老医がおり、この人が主治医として、しょっちゅう出入りしておられたが、私も、時どき、この医師の家へ、薬取りに行った。本多さんは、宇野さんのことを、「ああ頑固では、どうにもなりません」といつていた。というのは、医者^{いしや}のいうことを一つもきかなかったからである。肺結核ならば、治療のしようはあったはずであり、現代医学は、結核は相当の悪化したものでも治療できるところまでできているのであるが、宇野さんは、身辺の人たちが入院をすすめても、手術などは拒否された。亡くなられる三日前に、私は枕もとにすわって小一時間ほど雑談していたが、「水上さん、わたしはいま、残念なことが一つあります。それは、わたしの軀^{からだ}が……もう相当によわってしまっているということです」と聞きとりにくい言葉でいわれた顔を忘れることができない。

「あなたとも、ずいぶん長かった……」

それが宇野さんの私への最後の言葉であったが、孤独な宇野さんは身辺に玉子夫人を得、守道さん夫婦とお孫さんがいても、幸せではなかった。七十歳になって、はじめて、身辺がどうやら平和になったのに、恐ろしい病魔はもう軀をむしばんでいたのである。臼井さんの言葉ではないけれ



長男守道とその母 昭和8年

ど、若き日は女の業苦を背負い、中期にはかすがいの子の問題に悩み、母、精薄の兄、妻の死を見つめ、そして、晩年に至って、病魔との闘い^{たたか}であった。宇野さんは、自ら、深山幽谷と称した、万年床の書齋を一步も出なかったのである。宇野さんは若いころから、寝ころんで物を書いた。つまり生涯万年床であった。だから、私たち来訪者には、宇野さんが寝ておられても、それは、あの、かすかな神秘性をもたせたところの、文学の鬼の生活であり、小説のこゝとばかり考えて、思案のあげくにふて寝しておられるのだともみえたのである。

しかし、そうではなかった。机上に置かれた原稿用紙の字は何日も同じまま放置されていたし、病気はたしかに重かったのである。

台東区浅草北松山町の広大寺に墓がある。文徳院全誉貫